

## 3月第4週の礼拝説教

■日 時：2023年3月26日（日）10：30－11：30 受難節第5主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「隅の親石、主イエス」

■聖 書：ルカによる福音書 20章9～19節（新約 p149）

■讃美歌：13「みつかいとともに イエスのみ名の」305「イエスの担った十字架は」

いよいよ受難節も後半になりました。本日の聖書箇所ルカによる福音書 20章9節から19節は、そのことを踏まえながら読み進めてまいりましょう。本日の箇所は、主イエスがエルサレムにお入りになった後の出来事になります。それは主イエスのご生涯の最後の一週間、つまり受難週の初めの出来事でした。この時、主イエスはエルサレム神殿の境内で、民衆に教えておられました。その主イエスを、当時のユダヤ人の宗教的な指導者であった祭司長や律法学者、さらには民の指導者たちが殺意をもって見つめていました。しかし、民衆が夢中になって主イエスの話に聞き入っているのです、どうすることもできなかったのです。そのような状況の中で、主イエスは「ぶどう園と農夫」というたとえ話をなさいました。まず主人がぶどう園を作りました。そしてそのぶどう園を農夫たちに貸して長い旅に出ました。そしてぶどうの収穫の時期になったので、主人が収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのもとに送りました。農夫たちはその僕を袋叩きにして、何も持たせないで追い返しました。同じような仕打ちを、農夫たちは主人から送られてきた三人の僕に対して繰り返して行いました。けれども、マタイによる福音書やマルコによる福音書では殺されてしまう僕がいるのに、ルカによる福音書では僕たちは誰も殺されるまでには至っていません。本日の箇所の14節15節を見ますと、殺されたのは最後に送った「愛する息子」だけです。そして、このたとえ話を聞いていた律法学者や祭司長たちは、「**イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話された**」ことに気づきます。ここでもまた、「**イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。**」と「民衆」が出て来ています。そういうわけで、ルカによる福音書の著者は、主イエスに対して敵意や殺意を抱いていない「民衆」が主イエスの話を夢中になって真剣に聞いていたことに意味があることを記していると思います。

このたとえ話の内容は、律法学者や祭司長たちが気づいたように、旧約聖書に記されているイスラエルの民とその主なる神様との関係、そして、神からその時その時に選ばれて遣わされて来た預言者の関係をたとえていることに気づかされることでしょう。さらには、

13 節で「愛する息子」「跡取り」とたとえられているのが、まさに彼らの面前におられる主イエスであるということも見えてくることでしょう。そうしますと、ここでの主イエスと律法学者や祭司長たちのやり取りは、主イエスが十字架に向かって歩みを進められている中での重要な場面であることがわかります。そういうたとえを語られた上で主イエスは、15 節で「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人に与えるにちがいない」と語られました。先ほども申し上げましたが、ルカによる福音書だけが、このたとえ話を主イエスが話し始められた時の相手が「民衆」であったと記し、そこに私たちの関心を向けさせているのです。ですから、「彼らはこれを聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言った。」と記されている「彼ら」というのは、その民衆だったと考えることができます。彼らが「そんなことがあってはならない」と感じたのは、農夫たちが主人の僕を袋だたきにし、愛する息子を殺してしまうということだと考えられます。ぶどう園を作り、そこに自分たちを雇ってくれ、自分たちの生活が成り立つようにしてくれた主人に対して、そのようなことをするなんてとんでもないことだ、と彼らは率直に思ったのでしょう。私たちもまた、日常生活の中で生じる様々な事柄に対して、先入観や固定観念などにとらわれないで率直に向き合い受け入れる時には、その事柄の本質がありのままに見えてくるのではないか、と感じさせられる場面です。

そこから、17 節の「イエスは彼らを見つめて言われた。「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、これが隅の親石となった。』」と続きます。私はここで「彼らを見つめて」と記されていることから、ルカによる福音書 22 章 61 節の「主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。」という御言葉を思い出しました。22 章 61 節では、愚直なまでに主イエスに従ってきたペトロの心を受け止めて、振り向いてペトロを見つめられる主イエスのまなざしが描かれ、本日の箇所 17 節では、主イエスのたとえ話を夢中になって聞く「彼ら」と記されている民衆に対する主イエスのまなざしが優しく温かく描かれている、と私は感じています。そのように考えてみますと、詩編 118 篇の引用である「隅の親石」という言葉の意味が具体的に思えるように思います。私はある時まで、この「隅の親石」を家の土台に据えられる石と思っていました。つまり、家を建てる者によって不要なものとして捨てられた石が、別の家を建てる者によって見出され、新しい家の土台になると考えていたのです。ある方の言葉をお借りするなら、「農夫たちによって外に捨てられて殺されたはずの主人の息子は、すなわち十字架で死なれる主イエス・キリストは、それで終わらず、むしろそこから新しい

始まりが、新しい命が、キリストが殺された十字架から立ち上がる。そしてそこが新しい礎石となって、そこに新しく建てられる家を支える。それは神の家、教会を意味する。」というように理解していたのです。しかしある時、建築家の方がイスラエルなどの石造りの建物の話をしてくださって、新しく目が開かれました。「隅の親石」というのは、家の土台に据えられる石のことではなくて、石を積んでアーチが造られるときなどに、その一番上の真ん中に最後に据えられる石のことであると言われたのです。その石がしっかりと定位置にはまることによってアーチ全体が堅固な構造物となり、その石がはずされてしまうとアーチ全体が崩れてしまう、といういわばキーストーンであるということでした。それら二つの見方を合わせて考えてみると、18節の「その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」が現実味をおびて見えてきました。ここで主イエスがお語りになっているたとえば、隅の親石となる主イエスを拒み敵対するならば、その人は家の土台の石の上に落ちることになり打ち砕かれて滅びに至る、ということをまず指摘していると思います。次には、隅の親石をアーチの一番上に据えられている要石（頭石）、すなわちキーストーンと考えるならば、天地を揺るがすほどの出来事が起これば当然のことながら建物は崩壊し、キーストーンもだれかの上に落ちて来て下敷きになった人は押しつぶされてしまう、ということ指摘していると考えられます。しかし、いずれの場合も「隅の親石」は残るのです。主イエスの話を聞いていた律法学者や祭司長たちは、これらのたとえが自分たちに当てつけて語られたことに気づきました。そして、主イエスや民衆の前で、自分たちの本心が露呈されてしまったことを知ったのです。そのことは、主イエスを十字架へと追いやる彼らの動機がさらに強められることでもありました。しかし、このたとえを今この時に共に聞いている私たちが、この石を十字架につけられた主イエスと受け止め、古い自分自身の新たな土台となったださると考えることができるなら、そこに落ちる古い自分は打ち砕かれ押しつぶされて、そこから新しく歩み出すことができるはずです。そのように、主イエスを真の「隅の親石」として据えるなら、私たちは主イエスとしっかり結び合わされ、神様による救いに与ることができる者になっていく、と信じていることができるはずです。そのように考えて、この受難節の日々を心静かに過ごしていきたいと思えます。